

# Topic 68

## 米国ハワイ州とアラスカ州の VCP

- 1) こんなところ
  - 2) VCP (自主浄化プログラム)
- 

お疲れ様です。環境メルマの佐藤です。

今週は環境メルマブラウンフィールド米国 50 州の旅の最終編をお送りします。「米国の州はそれぞれが独立した国家のようだ」なんて表現をよく耳にしますが、州のブラウンフィールド政策をざっとみてみただけで、そう感じるところがありました。皆さんは如何ですか？

「独立国家みたいだ」というのは「自治が上手くできている組織だ」と言い換えることができるのではないのでしょうか。日米両国において「自治体」は存在していますが、実はその言葉の意味するところは両国において大きく異なっているようです。

環境メルマは、ブラウンフィールドと自治体をキーワードにした次なる環境メルマのテーマを準備中。4 月からスタートします！まずその前に、まずはハワイ州とアラスカ州でこのテーマの締めくくりをしましょう。

### 1) こんなところ

米国本土から遠く離れ、太平洋の真ん中に位置しているハワイ州。米国の州の中でも特に日本とゆかりが深い場所です。同州は 1959 年 8 月 21 日、50 番目に米国へ加入しました。総人口は約 130 万人弱 (2005)、人口密度は約 45 人/k m<sup>2</sup>。州都および州最大都市はオアフ島にあるホノルルです。

ハワイは、物理的にも精神的にも米国の中で一番アジア色が強い場所です。アジア系住民の中でも特に日系人が多く、また日本人に大人気のリゾート地ということもあり、アメリカに居ながら日本を感じる瞬間が沢山あります。ワイキキなどの観光地では日本語が通じたり、“bento(お弁当)”、“musubi(おむすび)”、“udon(うどん)”、“miso(味噌)”、“shoyu(醤油)”などが当たり前店頭前に並んでいます。

こんな感じですから、米国本土出身の方にとってハワイは「異国」に感じるのです。私はハワイに住んでいたのですが、ハワイ州に移り住んできた米国本土の人が、同地でカルチャーショックを受けたのを何度見たことか！外国人である日本人の私が、米国にいる米国人を励ましたりしたこともありました(笑)。そんな経験を分かち合いながら、東洋と西洋の文化が「こんにちは」して、いつの間にか少しずつ交じり合っていく土壌がある。だから人類学や言語学の研究にはもってこいの場所です。

ハワイは自然科学の研究にも世界的に注目されています。地質、地球物理、海洋生物、天文などの分野において、世界のサイエンティストがこの地の自然に魅せられ研究を重ね、現在のサイエンスへ貢献してきました。たとえば大気中の二酸化炭素の増加に関する研究、エルニーニョの研究などが挙げられます。

お次は米国最北端のアラスカ州。同州は北米大陸に位置しているものの、ハワイ同様に米国本土からは離れています。米国へ加入したのは、1959年1月3日（49番目）。ハワイ州よりも約半年はやい加入でした。総人口は約66万人（2005）、人口密度は1人未満！/k m<sup>2</sup>。州都はジュノー、州最大都市はアンカレッジです。

今からおよそ1万年前に終了した最終氷期に、インディアンやエスキモーがアラスカの地に到来したといわれています。エスキモーは北極海沿岸において狩猟生活を、インディアンは内陸部で狩猟生活をそれぞれ送っていました。19世紀に入るとロシアが同地に到達し植民地化し、その後、財政難から米国に売却されたという歴史があります。当時、この売買について米国市民は批判的でしたが、その後に同州には豊富な自然資源（金や油田）が埋蔵されていることがわかり、現在では当時のアラスカ購入決断が高く評価されているとのこと。

さて、アラスカといえば、私は二人の日本人を思い浮かべます。一人目はオーロラ研究の第一人者である赤祖父俊一さん。赤祖父さんはオーロラ研究で世界的に有名なアラスカ州立大学地球物理学研究所の所長を務められました。オーロラに関する著書を多数出版されており、素晴らしいお話が満載です。もう一人は星野道夫さん。アラスカに在住していた写真家であり、国内の雑誌はもちろん、ナショナルジオグラフィック等の海外著名雑誌にも作品を発表しています。星野さんの写真やお話は理屈抜きで信じがたいほどに心に響くものです。ご興味があればご覧になってみてください。

## 2) VCP（自主浄化プログラム）

さて、ここからは本題のブラウンフィールドです。

### ■ハワイ州

ハワイ州におけるブラウンフィールドの自主浄化プログラム（VCP）は、厚生局危険評価および緊急時対応課により運営されています。同プログラムには基本的な要素（財政インセンティブ、環境責任保護の仕組み）等が一応整ってはいますが、ほとんど活用されてはいません。2004年度の時点でプログラム登録中のサイト数は17件、浄化終了サイト数は6件。実際、同州には閉鎖された化学薬品工場跡地、製糖工場、DDT等の農薬を使用していたプランテーション農地などなどブラウンフィールドが存在しています。しかしブラウンフィールドが社会問題としてそれほど認識されていません。最近の動きとしては、2006年4月に州のブラウンフィールドフォーラムが初めて開催されており、啓蒙活動があったようです。しかし、同州においてブラウンフィールド事業が活発化することはあまり期待されていません。ちなみに、2005年の全米ブラウンフィールド会議にハワイ州出身の参加者にお目にかかりました。その方はブラウンフィー

ルド政策の特に税控除の仕組みに着目し、ご自身の事業に役立てようとしている方でした。へえ、こんな角度でブラウンフィールドを見るのもありなのね、と思ったのを記憶しています。

#### ■ アラスカ州

アラスカには比較的多数のブラウンフィールドが存在しており、ハワイ州よりも積極的な動きがうかがえます。

1996年、アラスカ州環境保全局（DEC: Department of Environmental Conservation）は、人の健康と生活環境を保護しつつ州内のブラウンフィールド（低リスク汚染サイト）の浄化を促進させるため、自主浄化プログラム（VCP）を立ち上げました。立ち上げ当初は、対象サイトが石油による汚染サイトに限定されていましたが、その後の法律修正により、プログラム対象条件が石油以外の汚染サイト、および条件つきで地下水汚染にまで拡張されました。現在ではVCPに取って代わるSCP（Streamlined Cleanup Program）が開発され実用化されています。これは、VCPと比較すると、より行政関与が軽減されており、浄化対策の更なる促進を狙っています。例えば以下のような項目が免除になっているのですよ。

- ・ 汚染除去活動の中間承認（Interim Removal Action approval）
- ・ サンプリングおよび分析計画の承認（Site characterization workplan approval）
- ・ サイト特性の報告書の承認（Site characterization report approval）
- ・ 浄化作業計画の承認（Cleanup operation workplan approval）
- ・ 承認された作業計画における汚染土壌の除去（Soil disposal in an approved workplan）

ブラウンフィールド自主浄化における規制緩和が進んでいるのですね。VCPから余計なものはどんどん排除してもっともっとシンプルに！といったところでしょうか。そのほか、DECは浄化対策における優先順位をきめるため、スクリーニングツールとして「アラスカ有害ランキングモデル」を利用しています。各々のサイト浄化をより速やかで経済的に行うだけでなく、州全体のブラウンフィールドの浄化および再開発の効率を上げるためには、このような手法は有効だと思われまます。アラスカのグリーンフィールドを保全、そして州の経済開発にむけて、ブラウンフィールド再開発をがんばっているようです。

環境メルマ米国50州の旅はこれでおしまい。4月には新しいテーマで環境メルマを発信いたしますので、どうぞお楽しみに。

Thanks God It's Friday!

Thanks God It's Brownfield!!

環境メルマ 佐藤 ([t.sato@ers-co.jp](mailto:t.sato@ers-co.jp))

---

坂野のつけたし ([banno@ers-co.jp](mailto:banno@ers-co.jp))

Nickname -▼ハワイ州：「The Aloha State (アローハ〜！で笑顔)」 「The Pineapple State (パイナップルの州：オアフ島にはDOLEの巨大パイナップル農場があります)」 「Paradise of the Pacific (太平洋の楽園)」 「The Youngest State (アメリカ50番目の州)」 ▼アラスカ州：「The Last Frontier (最後のフロンティア：アメリカ49番目(最後から2番目)の州であり、フロンティアと呼ぶにふさわしい景観を持っている)」 「Land of Midnight Sun (夏なら真夜中でも沈まない太陽が見られる)」 「Seward's Folly (Sewardの愚行：アメリカがロシアからアラスカ州を買うにあたり、当時国務長官のWilliam Sewardは議会から猛反対を受けた)」

事例紹介 -Fairbanks (フェアバンクス)：アラスカ州の環境保全局(DEC)の2007年度の予算計画書によると、同局の第一の目標は、環境を守ること、とくに、過去や現在も発生している汚染が大地や水に及ぼす影響を減らすことにあります。2005年度には、537箇所の汚染サイトで対策が完了しNo Further Action Letterが発行され、25箇所で新たな土地の活用が始まりました。フェアバンクスのベントレートラストが所有する土地はそのうちの一つです。

1970年代、フェアバンクスはアラスカを横断するパイプライン建設の要衝にありました。建設工事に必要な資材や重機の置き場となったこの土地は、ディーゼル油や油落としに使われた溶剤(トリクロロエチレン)で汚染されてしまいます。また、この広い土地には、砕石が採取された跡にできた池があり、その水を大量に汲み上げたことにより地下水が移動、結果として汚染が広がってしまいました。

1990年代後半から調査は開始され、土地の売却も徐々に進んでいきます。アラスカ州では、現土地所有者に浄化責任があるそうですが、ウォルマートやホームデポを含む、それぞれの所有者が応分の役割を果たしながら、開発が進んできています。浄化には、地下水に空気を吹き込んで溶剤を揮発させ回収する方法などが採用されました。

その後、調査により汚染状況が把握され、また、浄化も進み、人の健康や環境に対するリスクはきわめて小さいと判断したDECは、今後の浄化をNatural Attenuation(微生物など自然の力を頼りにして浄化を目指すもの)に切り替えました。汚染が残っているため、土地利用について制約(地下水を汲み上げてはいけない/DECの承認なく汚染土壌を搬出してはいけないなど)が課されています。地下水を飲む程度にまで浄化することが目標となっています。(アラスカでNatural Attenuationはちょっとしんどいような気がします。時間の流れ方が違うのかもかもしれません。坂野の独り言でした。)

▼参考情報

[http://www.dec.state.ak.us/SPAR/csp/sites/bftrust\\_201.htm](http://www.dec.state.ak.us/SPAR/csp/sites/bftrust_201.htm) (ベントレートラストの浄化経緯。写真が何枚かあります。)

[http://www.gov.state.ak.us/omb/07\\_OMB/budget/DEC/dept18.pdf](http://www.gov.state.ak.us/omb/07_OMB/budget/DEC/dept18.pdf) (DECの2007年度予算計画)

[http://www.gov.state.ak.us/omb/07\\_OMB/budget/DEC/comp2386.pdf](http://www.gov.state.ak.us/omb/07_OMB/budget/DEC/comp2386.pdf) (DEC汚染サイトプログラムの2007年度予算計画)